

日本の女

芥川龍之介

青空文庫

ここに面白い本がある。本の名は「ジヤパン」で、発行されたのは一八五二年である。著者はチャアレス・マツクフアレエンといひ、日^{につぽん}本に来たことはないが、頗^{すこぶ}る日本に興味をもつた人である。少くとも、興味をもつたと称する人である。「ジヤパン」は、この人が、ラテン、ポルトガル、スペイン、イタリイ、フランス、オランダ、ドイツ、イギリス等^{とう}の文^{ぶん}献^{けん}から、日本に関する記事をあつめ、それを集大成したものである。それ等の文献は、一五六〇年から一八五〇年^{あひだ}の間のものをあつめたものであるが、

著者がかういふ題目、即ち、日本につほんに興味をもち出したのは、兵へ站いたん総監ジエムス・ドラマンドといふ人のおかげだつたらしい。なんでも、このドラマンドなるものは、若い時に実業に従事して、イギリス人であるにも拘かかはらず、オランダ人といふ名前もとの下に日本にも数年住んでゐた。著者マツクフアレエンは、ブライトンで、このドラマンドに会ひ、その、日本に関する書物の蒐しゅうしふ集を見せ、て貰つた。ドラマンドは、著者にそれ等を貸したばかりでなく、いろいろ、日本の事情などを話して聞かした。著者はそれ等の談話をも参照して、この「ジャパン」といふ本を書きあげたのである。猶なほ、ついでにつけ加へれば、このドラマンドといふ人は、名高い小説家スモレットの曾ひいめひ姪を細君にしてゐて、そのまた細君

は、甚だ文学好きだつたといふことである。

この本はかういふ因縁いんねんの下もとに出来あがつたものであるから到た底うてい實際日本の土を踏んだ旅行家の紀行ほど正確ではない。現に銅板の挿絵さしゑなども朝鮮の風俗を日本の風俗として、すまして入れてあるくらゐである。しかしそれだけに今日こんにちのわれわれから見ると一種の興味のない訣わけではない。例へば日本の皇帝は煙管きせるを沢山もつてゐて、毎日違つた煙管で煙草をのむなどといふことを真ま面目じめに記載してゐるのは頗る御愛嬌ごあいけうといはなければならぬ。この本の中に日本の女を紹介せうかいし且つ論じた一章がある。それを今ざつと紹介して見ようと思ふ。

女が社会的にどういふ地位を占めしてゐるかといふことは、著者

マツクフアレエンによれば、文明の高低をはかる真の尺度であるが、日本の女の社会的地位は、如何いかなる他の東洋諸国よりも、数等高い。日本の女は、他の東洋諸国の女のやうに、幽閉いうへい同様の憂うき目めを見てゐない。相当の社会的待たい遇ぐうを受けてゐるのみならず、その父や夫の遊樂にあづかることも出来るものである。

妻の貞操や処女の童貞の如きは、全然、彼等の名譽の觀念に一任されてゐるが、不貞の妻などといふものは、殆ほとんど一人ひとりもゐないといつてもいい。尤もつともこれは、貞操を破つたが最後、直ちに死を受けるといふ事実のために、一層嚴守されてゐることは事実である。

日本では、一番身分の高いものから、一番身分の低いものに至

るまで、誰だれでも必ず学校教育を受ける。伝ふるところによれば、日本国中の学校の数すうは、世界中のどの国の学校の数よりも多いといふことである。且つまた、農夫並びに貧民ひんみんさへ、少くとも読むことは出来るといふことである。従つて、女の教育も男の教育と同じやうに完備くわんびしてゐる。現に、日本で非常に有名な詩人、歴史家、その他の著述家ちよじゆつかとう等のうちには、女も非常に多いくらいである。

金持ちや貴族の間あひだでは、男は概して、女ほど貞操ていさうを守らない。しかし、母や妻である女が、純潔に生涯を送ることは最も確實である。それは、日本に伝へられる種々の物語に徴しても、また、大勢おほせいの旅行家の見聞けんぶんした事実じじつに徴しても、疑ふ余地はないと

いはなければならぬ。

日本の女は、何よりも、不名誉を恥ぢるものである。屈辱くつじよくを被つたために自殺した女の話は、枚挙まいきよし難いといつてもよい。下の物語は、かういふ事実を立証するに足るものである。――

或る身分のある男が、旅行に出た。その留守るすにまた、或貴族が、彼の（即ち、身分のある男の）妻に横恋慕よこれんぼをした。が、彼れの妻は、その貴族の誘惑いうわくに陥らなかつたばかりでなく、さんざん侮辱を加へさへした。しかし、その貴族は暴力を用ひたか、或ひはまた、謀略を用ひたかして、とにかく、その女の貞操を破つてしまつた。そこへ夫をつとが帰つて来た。彼れの妻はいつものやうに、愛情をもつて夫を迎へた。しかし、その態度の中には、何か、嚴げん

として犯すべからざるところがあつた。夫はその態度を不思議に思つて、いろいろ問ひただして見たけれども、彼れの妻は、どういふ訣か、かう答へるばかりだつた、——「どうか明日まで、何事もおたづね下さいませ。明日になれば私は私の親戚やこの町の重なる方々に来て頂いて、その前で、一切の事情を申し上げます。」

さて翌日になると、客は続々として、夫の家へ集まつて来た。その客の中には、彼れの妻をはづかしめた貴族もまた、混つてゐた。客は皆、その家の屋根にある露台で、饗応を受けた。そのうちに御馳走がすむと、彼れの妻は立ちあがつて、彼女の被つた屈辱を公にした。のみならず、熱烈に、夫にかう云つた。——

「私はあなたの妻となる資格を失つたものでございませう。どうか私を殺して下さいませう。」

夫をはじめ、そこにゐた客は皆、彼れの妻をなだめ、彼女には何も罪はない、彼女はただその貴族の犠牲になつたばかりである、といった。彼れの妻は、彼等一同に深い感謝の意を示した。それから、夫の肩にすがつて、胸もさけるほど慟^{どうこく}哭した。しかし、突然夫に接吻^{せつぶん}したと思ふと、その次の瞬間には、夫の手を振りはらひながら露台の端^{はし}へ駆けて行くが早いか、遙^{はる}か下へ身を投げた。

けれども、彼の妻は凌辱^{りようじよく}を被^{かうむ}つたことは公^{おほやけ}にしても、誰が凌辱を加へたかといふことは、公にしなかつた。そのために、凌

辱を加へた貴族は、夫や客の騒いでゐる間にそつと露台の階段を下つた。そして自殺した彼女の死骸のそばで、武士らしく、立派りっぱに切腹した。この切腹といふのは、日本の国民的自殺法であつて、腹の上を、彼れ自身十文字に切つて 往わうじやう生せいするのである。

「ジャパン」の著者マツクフアレエンによれば、これは、ランドオルの追憶記といふものにある話だといふことである。実際、日本にかういふ話があるかどうかは、私わたしにはわからない。ちよつと考へて見たところは、徳川時代の小説や戯曲の中うちにも、同じ話は見当らないやうである。或ひは、九州かどこかの田舎あなかに、ほんたうにあつた話かも知れない。けれども、屋根の上の露台で宴会を開いたり、日本の武士の女房が、御亭主ごていしゆに接吻したりするのは、

いかにも西洋人らしくて面白い。尤も、面白いといつて笑つてしまへば簡単であるが、昔の日本人の西洋を伝へたのも、やはり同じくらの間違つてゐることを思へばあまりいい氣になつて、西洋人ばかり笑つてゐられぬことは事實である。いや、西洋どころではない。隣国の支那のことを伝へたのでも、このくらの間違ひは家常茶飯である。早い話が、近松門左衛門の「国姓爺」うちゑんの中に描かれてゐる人物や風景を読んで見れば、やはり、日本とも支那ともつかぬ、甚だ奇妙な代物である。しろもの

マックフアレエンは、この外にもう一つ、如何に日本の女が偉いかを示す話を挙げてゐる。——「チュウヤといふ偉い武士が、彼れの友達のジオシツといふものと共に、皇帝に対する陰謀を企

てたことがある、このチウウヤの妻は、才色兼備の女だった。チウウヤの陰謀は五十年間秘密に計画された後、とうとう、チウウヤの失策しつさくのために、露顕ろけんすることになった。そして政府は、チウウヤ並びにジオシツを逮捕たいほせよといふ命令を出した。当時の事情に従へば、少くとも、チウヤを生捕いけどりにすることは、絶対に、政府には必要だった。そのためには、どうしても、不意打ちふいとうを喰はせなければならなかつた。そこで、捕手とりてはチウウヤの門の前で『火事だ、火事だ』といふ声をあげた。チウウヤは火事を見届けみとどるために、門の外へ走り出した。捕手とりてはそれを襲撃した。しかしチウウヤは、勇敢に戦つて、捕手を二人斬り殺した。けれども、とうとう多勢たぜいに無勢ぶぜいで、捕手のために逮捕されてしまった。チウ

ウヤの妻は、その間に、あひだ格闘かくとうの音を聞いて、早くも捕手の向つたことをさとり、夫の重要書類を火の中に投げ込んだ。その書類には、陰謀の一味たる貴族などの名前も載のつてゐたのである。チウヤの妻のおちついてゐたことは、こんにち今日でも、日本中の驚嘆ま的になつてゐる。そのために女の判断力並びに決断力をほめる場合には、チウヤの妻のやうだといふくらゐである。」

このチウヤは、勿論、丸橋まるばし忠弥ちゆうやであり、ジオシツは由ゆ

井正雪やうせつである。これもマツクフアレエンに従へば、やはり、ランドオルの追憶記に出てゐる話らしい。

「ジャパン」の著者マツクフアレエンの伝へた日本の女は、殆ほとんどユウトピアの女である。如何いかに一八六〇年代の日本の女でも、

処女や妻の貞操がそれほど立派りつぱに保たれたといふことは、信用出来ないので違ひない。これも、マツクフアレエンの馬鹿正直を笑つてしまへばそれだけであるが、外国の風俗人情を伝へる場合には、今日こんにちでも多少かういふ喜劇の行はれやすいのは事実である。この間も何かの新聞に何んとか女史が、アメリカの女学生の生活を天使の生活のやうに吹ふ聴いしてゐたが、あの記事なども、半世紀後のアメリカ人の目に触ふれたらば、やはり、マツクフアレエンの「ジャパン」と同じやうに、一いつせう笑ふに附せられるに相違ない。

サア・ラザフオオド・オルコツクの「日本につぽんにおける三年間」は、マツクフアレエンの本とくらべると、余程よほど、日本の真相を正確に伝へるものである。

これは上下二巻で、千八百六十三年、ニユウヨオクのハアバア書肆しよしから出てゐる。挿絵さしゑも沢山たくさんあり、その中にはまた、蕙齋けいさいの漫画などを複製したのも沢山たくさんある。

第一に著者サア・ラザフオオド・オルコツクは、マツクフアレエンのやうに、机の上で日本を想像したのではない。この本の標題の示すとほり、三年間日本に住んでゐる。

第二は、サア・オルコツクは、マツクフアレエンのやうに無學ではない。相当に學問もあり、殊に、當時流行のミルの哲學など

にも通じてゐる。そのために、日本で見聞けんぶんした種々の事件に対しても、それぞれ、彼れ自身の見解を下してゐる。その見解の中には、今日こんにちはわれわれを微笑びせうせしめるものもあるけれども、傾け聴いすべきものもないわけではない。これがまた、マツクフアレエンの本などには、全然見られぬ特色である。

サア・オルコツクは、徳川幕府とくがはばくふの末年まつねんに日本に駐割ちうさつした、イギリスの特命全権公使である。その日本駐割中には、井伊大老ゐいたいらうも桜田門外さくらだもんぐわいで刺客せきかくの手に斃たふれてゐる。西洋人も何人か浪人のために殺されてゐる。

といふと人事ひとごとのやうに聞えるが、サア・オルコツクの住んでゐた品川しながはの東禅寺とうぜんじにも浪士が斬り込んで、何人かの死傷を生

じた事件もある。その上、サア・オルコツクは、富士山へ登つたり、熱海の温泉へはひつたり、可なり旅行も試みてゐる。かういふ風に、内外共多事の幕末の日本に住み、且つまた、江戸にはかりみずに方々歩き廻つたのであるから、サア・オルコツクの本紀行の興味の多いのは偶然ではない。

尤も、サア・オルコツクの日本紀行は、ロテイやキプリングのそれのやうに、芸術的色彩には富んでゐない。例へば浅草を描くにしても、ロテイの「日本の秋」の中の浅草のやうに、目のあたりには、黄ばんだ銀杏だの、赤い伽藍だのが浮んで来ないことは事実である。しかし前にもいつたやうに、その見聞した事件に対する見解は、なかなかおもしろい。

例へば、サア・オルコツクは、或る田舎家ゐなの縁先で、ばあさんが子供こどもに灸きゅうをすゑてゐるのを見て、「われわれ人間は、古今ここんを問はず、東西を問はず、架空かかくの幸福を得るために、自らみづか肉体を苦しめることを好むものである」と嘆息たんそくしてゐる。また、或る山を越える時に、ふと鶯うぐひすの声を聴いて、「鶯の声はナイチンゲルの声に似てゐる。日本の伝説によれば、日本人は鶯に音楽を教へたといふことである。これはもし事実とすれば驚くべきことに違ひない。なぜと云へば、日本人は自らみづか音楽を解しないのだから。」と嘲あざけつてゐる。

これ等は微笑せずにはゐられぬ見解であるが、桜田門外さくらだもんの変に際して日本人の復讐ふくしう崇拜すうはいを論じ、忠臣蔵ちゆうしんぐらの芝居などの

民衆に与へる影響を論じたあたりは、なかなかおもしろい議論である。が、あまり横道にはいると、本題にはいるに手間取るから、その紹介は後の機会に譲ることにしたい。

しかし、その前に「日本における三年間」の大体を紹介するた
めに、サア・オルコツクのはじめて長崎へはいつた時の印象を
披露すれば、ぎつと下のとほりである。——

「雨の降つてゐる中に長崎の港へ船のはいつたのは、六月の四日
（千八百五十九年）である。この港は、もう何度も、日本へ来た
旅行家の筆に残つてゐる。しかし、曇つた空の下に見ても、全然
美しさのないわけではない。港へはいるのに従つて、いくつもの
島が目の前に浮んで来る。その島にはまた、絵のやうに美しいの

も多い。

「船がずっと湾の中へはいると、長崎の街がむかうに横たはつてゐるのが見える。長崎の街は、幾つも連つた小山の裾にある。そして、木の茂つた小山の原へ、可なり高く匍ひあがつてゐる。右に見えるのは出島である。出島は扇の形をした、低い土地である。それが陸の方へ扇の柄を向けて、海の中へ突き出してゐる。出島には長い、広い一条の街路が通り、両側には、ヨオロツパ風の二階家がならんでゐる。見たところは、いかにも小じんまりしてゐる。（中略）

「湾そのものの、第一印象は、頗る、ノオルウエイの峽湾に似てゐる。殊に、ノオルウエイの首府クリスチャニアにはいるとこ

ろに似てゐる。尤も峡湾は、長崎の湾より美しい。長崎の湾も小山は水際からすぐに聳え立つて、そのまた小山には、鬱々と松が茂つてゐる、しかし上陸して見ると、植物はノオルウエイよりも遙かに熱帯的である。柘榴だの、柿だの、椰子だの、竹だのもある。がまた、くちなしだの、椿だのも茂つてゐる。あたりまへの菌朶も到る所にある。木蔭も壁にからんでゐる。道ばたには薊も沢山ある。」

まあかういふ調子である。さて、その日本の女を論ずるのを見ると、サア・オルコツクによれば、日本の女の社会的地位とか、男子との関係とかいふものは、古来常に賞讃されてゐる。しかし、実際、その賞讃に値するかどうか、疑はしいといはなければなら

ぬ。^{わたし}私は（サア・オルコツク）ここで、日本人が国民として、他の国民よりも不道徳かどうかといふ問題にはいるつもりはない。けれども日本では、父が、^{ばいん}売淫のために娘を売つたり、或ひは^{やと}雇はせたりしても、法律はこれを罰しないのである。のみならず、それを認可するのである。且つまた、彼等の隣人さへも、全然、彼等を^{ひなん}批難しない。かういふ国に健全なる道徳的感情が存在するといふことは、私の信じられぬところである。

なるほど、日本には奴隷の制度はない。農奴や奴隷や家畜のやうに売買される事はない。^{もつと}（尤も、ないといふのは半面の真理にとどまつてゐる。なぜといへば、日本の娘は一定の年限内といふものの、とにかく法律の定めるところにより、人身売買を行ふか

らである。して見ると男や少年も多分売買されるのに相違ない。しかし、めかけたくは妾を蓄へる制度が存在する以上、家庭の神聖が保たれぬことは、なんびと何人にも見易い道理である。

かういふ国民的罪惡の害毒は、何によつてくわんわ緩和されるか、それは差さしあた当り発見出来ない。しかしその緩和剤の一部は、たしかに支那におけるやうに、子に対する母の權威が非常に強いことにあるやうである。

日本の女は商品同様に扱はれ、彼等の意志も顧かへりみられず、彼等の女としての権利も顧みられず、夫に売をられるものである。且つまた夫の在世中は、家畜或は奴隸のやうに扱はれるものである。

しかし子供に対する絶対の權威は、いやしくも子供に関する限

り、母としての日本の女を、男よりも高い位地に据ゑるために、幾分この害毒が緩和されるのである。恐らくはミカドの位にさへ、女が上ることの出来るといふのは、かういふ例の一つであらう。

実際また、女のミカドといふものは、古今に少くはないのである。たしかに日本の女の位置は、家畜や奴隸のやうに売買されるにも拘らず、存外辛抱の出来る点もないではないらしい。しかしこの点に関しては、まだいろいろ調べて見なければ、はつきりした判断を下すことは出来ない。また、親子の間の情愛も相当にあるやうである。とにかく日本人には、愛兒的器官も発達してゐるのに違ひない。

サア・オルコツクの日本婦人は、とにかく、マツクフアレエン

のそれよりも、正せいこう鵜を得てゐる。日本の女の社会的地位は、サア・オルコツクの日本に駐ちゆうさつ割した時代、即ち嘉永万延かえいまんえん以来あまり進歩してはゐないらしい。

しかし、サア・オツコツク以前の西洋人が、日本の女を讚美さんびしたのは、客観的に日本の女の社会的地位や何かを觀察した上讚美したのかどうか、疑問である。それよりはむしろ、日本の女を實際ラシヤメンにして見た結果、正直だつたり、忠実だつたりしたために、大いに感謝の意を生じたのかも知れない。

これは徳川幕府の初年の話であるが、肥前平戸ひぜんひらどをイギリス人の引揚げる時にも、彼れ等は日本人の女房に、大いに依々いれんれん恋々としたといふことである。すると、サア・オルコツクもラシヤメ

ンを一人もつてゐたらば、必ずしも、日本の女を輕蔑けいべつすること、かくの如きには至らなかつたかも知れない。けれどもそのために、日本の女に対する正当に近い見解を得ることの出来たのは、少くとも後代の読書どくしよ子には幸福であるといはなければならぬ。

わたしは先年支那へ遊あそんだ時、揚子江やうすかうを溯さかのぼる船の中で、或るノオルウエイ人と一いっしよ緒しよになつた。彼れは、支那の女の社会的地位の低いのに憤慨ふんがいしてゐた。

何んでも彼れの話によれば、直隸ちよくれい河南かなんの大饑饉だいききんの際には、支那人は牛を売るよりも先に女房を売りに来たといふことである。それにも拘かはらず、このノオルウエイ人は、妻としての支那人ないし乃至日本人を雲の上までほめ上げてゐた。現に彼れは、同船のアメリカ

カ人の夫婦と、そのためにはげしい論戦を開いたくらゐである。すると男といふものは、理窟りくつの如何いかんに拘かからず、とにかく、内心では妻として——サア・オルコツクの言葉をを用ゐれば、家畜或ひは奴隸としての女に、讚嘆の情を禁じ得ないものらしい。即ち、婦人運動が婦人自身の手を俟まつほかに、成功する見込みがない所以ゆゑんである。

(大正十四年五月)

青空文庫情報

底本：「筑摩全集類聚 芥川龍之介全集第四卷」筑摩書房

1971（昭和46）年6月5日初版第1刷発行

1979（昭和54）年4月10日初版第11刷発行

入力：土屋隆

校正：松永正敏

2007年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

日本の女

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>